A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

6

オースティン

エ　マ　　阿部知二訳

中央公論社

世界の文学　6　©1965

オースティン

訳者　阿部知二

昭和40年4月1日初版印刷
昭和40年4月10日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

エマ

解説　3
年譜　474
492

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

エ

マ

第一章

エマ・ウッドハウスは、美しく、才気にとみ、裕福であって、あたたかな家庭と明るい気質とを持ち、生活の最上の恵みのかずかずを身に集めているように見え、世に生をうけてかれこれ二十一年になるが、苦しみも悩みもほとんどなかったのである。

いたって愛情にみちた甘い父親の二人娘の下のほうで、姉が結婚したために、ごく若いころから一家の女主人となっていた。母はあまりにも前に亡くなっていたので、その愛撫についての記憶はおぼろげにしかなく、母の座は、家庭教師としてきた優れた婦人がとって代わっていたが、愛情の点でも、母親のそれにほとんどゆずらないほどであった。

十六年間、そのテーラー嬢はウッドハウス氏の家庭に加わり、家庭教師としてというよりはむしろ友人として、二人の娘をひじょうに愛したのだったが、とくにエマが好きだった。彼女たちの間は、むしろ姉妹の親しさだった。テーラー嬢は、家庭教師という名目の役割からしりぞく以前からも、その温和な性質からして、娘たちを束縛する心になれないのだった。そしていまでは、権威という黒い影は、とっくに消えさっていたので、彼女たちは、たがいに友人、それもいたく愛し合う友人同士として、起臥をともにしていたのである。エマは自分の好きなようにふるまい、テーラー嬢の判断力を高く評価してはいたが、主として自分のそれにしたがって動いていた。

じつはエマの境遇としてほんとうに困った問題といえば、あまりに思いのままにできすぎる力と、自分を少々よく思いすぎる気質とだった。そうしたことは、彼女のかずかずの喜びに濁りのかげをおとす恐れのある欠陥だった。けれども、その危険はいまのところ、あまり目につかず、けっして彼女の不幸とはなっていなかった。

悲しみがおとずれてきた――おだやかな悲しみが――それは、けっして不快の意識の姿をとってではなかったが――テーラー嬢が結婚したのである。テーラー嬢を失ったことこそ、最初の悲しみの味だった。はじめてエマが、なにほどかの時間持続する憂愁に沈んだのは、この愛する友の結婚の日だった。式が終わり、結婚式場の人人がいってしまい、父と彼女とはあとに残され、長い夜に、だれか他の人が慰めにきてくれる見込みもなく、二人で食事をとった。父はいつものように、晩餐がすむと

引きとって静かに眠ろうとし、それで彼女は、じっと坐って、自分が失ったものについて思いふけるばかりだった。

その結婚は、彼女の友に幸福を十分に約束するものだった。相手のウェストン氏は申し分のない性格の人物で、楽に暮らせる財産があり、似合いの年齢で、気持のいい身だしなみの持ち主だった。エマは、自分が日頃から、いかに私心のない、惜しみない友情をもってその縁組を願い、支持してきたかを考えると、ある満足が感じられた。しかし、彼女にとってそれは朝ごとの暗い物思いの種になろう。テーラー嬢のいないことが、毎日毎日一時間ごとに感じられるだろう。彼女はテーラー嬢の過去の親切を思い出した。――十六年間の親切、愛情――自分を教えてくれたこと、五歳のときから自分の遊び相手になってくれたこと――自分が健康なときには、つきそって楽しませようと力のかぎりをつくしてくれたこと――子ども時代のさまざまな病気をしたとき、倦まず看護してくれたことなど。その点では大恩の借りができていたが、ここ七年間のつきあい、姉のイザベラが結婚して、二人きりになるやいなやの、平等の立場と完全な遠慮のなさとは、さらにいっそう貴重な、いっそうなつかしい思い出だった。世の人に恵まれることは稀な、友であり伴侶であり、聡明で博識で有能で上品で、家族のあらゆるくせを知り、その関心事に興味をもち、とくに、エマにとっては、その喜びという喜び、計画という計画に心をつかう友――彼女のあらゆる思いを、浮かびくるままに打ち明けることができ、彼女の欠点など見つけるすべも知らぬほどに、愛情を傾けてくれた友であった。

これからこの変化にどう耐えてゆくべきか――なるほど、友は自分たちから半マイルしか離れていないところへゆくのだが、ほんの半マイルほど離れた地のウェストン夫人と、家にいるテーラー嬢との相違は、さぞかし大きなものにちがいないということに、エマは気がついていた。生まれながらの資質にも、また家庭的にも恵まれていた彼女ではあるが、いまや、精神的なさびしさに悩むという大きな危険にさらされているのだ。彼女は父を心から愛してはいたが、父は彼女の伴侶ではなかった。彼は、知的な会話でも、またおどけた会話でも、彼女の相手になる力がなかった。

親娘の年齢にはっきりと開きがあるという不都合さ（ウッドハウス氏は早婚ではなかったのである）は、彼の性質と慣習とのためにいよいよひどくなっていた。何しろ、父は生涯ずっと虚弱で、心身ともに動かさずにいたので、年齢よりは生活ぶりの点でずっと老けていたのであった。どこへいっても、親切な心と愛想のいい気質とのために人から愛されていたが、彼の才能は、いつで

Emma

も人に高く評価されるというようなものではなかった。
姉は、ほんの十六マイルさきのロンドンに住んでいたので、結婚しても比較的近くにいるといえるが、毎日ゆけるものではなかった。そこで、クリスマスにイザベラや夫やその小さな子どもたちがまた訪ねてきて、久しぶりで家じゅうがいっぱいになり、楽しいまどいをもつまでに、このハートフィールドでは、十月と十一月との長長しい夜に耐えてゆかなければならない。
ハートフィールドは、その草地も樹林も、また名称も独立しながら、ほとんど町にもひとしく大きくて人口の多い村のハイベリーに属しているのだが、そこでは彼女は対等の相手を見いだすことはできなかった。ウッドハウス家は、そこでは第一に重きをなしていた。だれもが彼らをたてまつっていた。父はだれにでもていねいだったから、彼女にはこの土地にたくさんの知り合いがあったが、それでもたとえ半日なりとも、テーラー嬢の代わりに迎え入れてもいいような人は、ただの一人もいなかった。まことに悲しい変化である。エマは、父が目をさまし、いやでも自分が快活にしなければならなくなるまで、そのことを考えては溜息をつき、不可能な願いにふけるよりほかに道もなかった。父の機嫌をよくするのには、支えが必要だった。神経質な人で、すぐにふさぎこみ、だれでも自分が慣れた人を好み、そういう人たちと別れるのをいやがり、あらゆる種類の変化をいやがった。結婚というものは、変化のもととして、つねに気に入らなかった。まったく愛情にみちた縁組だったが、娘の結婚にはまだけっしてあきらめがつかなかったし、娘のことを話すとなると、不憫なものだとしかいわないのであったが、そのうえ今度は、テーラー嬢とも別れなければならなくなったのだ。それで、おとなしいが自分本位で、ほかの人の感じも自分とちがうはずはないと考える習慣から、テーラー嬢は、自分たちにだけでなく彼女自身にとっても悲しむべきことをしたもので、もし彼女がハートフィールドでこれからの生涯を送ったとすれば、ずっと幸福だったろうに、などと考えたくてたまらないのであった。父にそんなことを考えさせまいと、エマはできるだけ快活に微笑し、おしゃべりをした。だがお茶のときがくると、正餐のときにいったことを、彼はそっくりそのままいわずにはいられなかった。
「かわいそうにテーラーさんは！――ここへもどってくればいいのだがね。ウェストン君が、彼女に心をとめたなんて、なんて情けないことになったのだろう！」
「それには賛成できませんわ、お父さま。賛成できないことはおわかりでしょう。ウェストンさまは、気だてのいい、愉快なすばらしい方なんですもの、よい奥さまをもらう値打ちは十分ありましてよ――そしてテーラーさ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

んがご自分の家をもてるというのに、お父さまは、あの方を一生ここにとどめて、わたしのお天気な性質を我慢させるおつもりじゃないでしょうね」

「自分の家だって！――でも、自分の家をもって何の得がありますか？　ここのほうが三倍も大きい――それに、あなたにはべつにお天気な気質などないだろう、ねえ」

「何度だって会いにゆけますし、向こうからも会いにきてくださるじゃありませんか！――いつでも顔を合わせられますわ！　わたしたちのほうから、はじめなければ。すぐにも、結婚祝いの訪問をしなければなりませんわ」

「ねえ、わたしにどうしてあんな遠くまでゆけるかね？　ランドルはとても遠いんだよ。わたしはあの半分も歩けやしない」

「いいえ、お父さま。お歩きになることなんか、だれも考えていませんわ。もちろん、馬車でゆかなけりゃなりません」

「馬車でだって！　でも、うちのジェイムズはあんな近くへ馬を出すのをいやがるだろう――それに、わたしたちが訪問しているあいだ、馬はどこへおくんだね？」

「ウェストンさまの厩舎に入れておけばいいわ、お父さま。そのことはもう解決ずみでしたわね。ゆうべ、ウェストンさまとそのことをすっかり相談したじゃありませんか。それにジェイムズだって、きっとランドル行きを

いつも喜びますわ。娘があそこで女中をしているのですもの。ジェイムズが、わたしたちをほかのどこへ連れてゆきたがるか、ほんとに疑わしいわ。あれは、ご自分でなさったことでしょう、お父さま。ハナにあんないいところを世話しておやりになりました。お父さまがハナのことを口にお出しになるまでは、だれもあの人のことを思いつかなかったのですわ——ジェイムズは、とてもお父さまに感謝していますわ！」

「あの娘のことを思いついて、わたしもたいへんうれしいよ。ほんとうに運がよかったのだね。わたしは、何ごとにもあれ、あのジェイムズに、自分は軽んじられているなどと思わせたくなかったからだよ。きっと、あの娘はそれはいい召使になるだろう。しとやかな、言葉づかいのいい娘だからね。わたしはたいそうあの娘を買っているよ。いつ会っても、とてもきれいな身ぶりで、膝をまげて、ごきげんいかがでございますかとたずねるのだよ。ここへ呼んで針仕事をしてもらっても、いつもちゃんと扉の掛金をまわして、ばたんとなんかいわせない。きっと、あの娘はすばらしい召使になるよ。そばに見なれたものがいるっていうことは、テーラーさんには大いに心強いだろう。ジェイムズが娘に会いにあそこへゆくときはいつでも、テーラーさんはわたしたちの話を聞くだろうね。ジェイムズは、わたしたちが元気でいるかどうか話せるわけだから」

エマは、このように楽しい思いがいよいよつのりつづけるようにと、あらんかぎりの努力を惜しまず、バクガモン（すごろく）の助けをかりて、父にどうにか気持よく夜をすごさせ、悲しい思いにおそわれるのは自分だけにしたかったのである。バクガモン台が用意されたが、すぐそのあと、客がはいってきたので、それは必要でなくなった。

三十七、八歳ほどの、心こまやかな男性のナイトリー氏は、一家のごく古くからの親しい友人であったばかりでなく、イザベラの夫の兄として、家族とは特別に昵懇（じっこん）の関係にあった。ハイベリーから一マイルばかりのところに住み、よく訪ねてきて、いつも歓迎されていたが、このときは、ロンドンのおたがいの肉親に当たる家からまっすぐにきたところなので、いつもよりいっそう歓迎をうけた。数日間家をよそにして、おそい正餐にまにあうようにもどってきて、いまや、ブランズウィク・スクエアのみなみなが元気なことを知らせるため、ハートフィールドまで歩いてきたのであった。この喜ばしい出来事に、ウッドハウス氏はしばらく活気づくのであった。ナイトリー氏は態度が朗らかで、それがいつもウッドハウス氏のためにいい効果をあげた。「かわいそうなイザベラ」や子どもたちについての、かずかずの質問は、き

わめて満足のゆくように答えられた。それがおわると、ウッドハウス氏は感謝をこめていった。
「ほんとうにご親切さまです、ナイトリーさん、こんなにおそくお訪ねくださって。さぞかし道で難儀なさったことでしょう」
「どういたしまして、美しい月の晩ですよ。とても暖かいので、こんなによく燃える暖炉のそばへは寄りつけませんね」
「でも、さぞかし湿っぽくて、道がぬかるんでいたことでしょう。かぜをひかなけりゃいいのですが」
「ぬかるみですって！　ぼくの靴をごらんください。泥ひとつついてません」
「ほほう！　それはおどろき入りましたな。ここではひどく雨が降りましたのでね。朝食をとっているとき、三十分ほど、ほんとにおそろしい降りでした。結婚式を延ばしてもらおうかと思いましたよ」
「ときに――まだお喜びを申しあげておりませんが。お二人とも、どんな種類の喜びを感じておられるか、十分にわかっておりますので、あえて急いでお祝いを申しあげませんでした。しかし、万事とどこおりなくいったのでしょうね。あなたがたはどんなに振舞われました？　いちばん泣いたのは、どなたでしたか」
「ああ！　気の毒なテーラーさん！　悲しいことです」
「失礼ですが、気の毒なウッドハウスと令嬢、のまちがいでありませんか。とにかく、ぼくには『気の毒なテーラー嬢』とは、いえませんよ。あなたとエマとの気持は大いに尊重しておりますが、しかし依存と独立とのどちらを取るかという問題となりますとね！――ともかく、気に入ってもらいたい人が一人だけのほうが、二人あるよりはいいにちがいありませんよ」
「とくに、その二人のうちの一人がひどく気まぐれで、厄介な人ときていてはね！」とエマはおどけていった。
「それが、あなたの頭にあることなのでしょう――そして、お父さまがそばにいらっしゃらなければ、きっとそうおっしゃりたいのでしょう」
「いかにも、まさにそのとおりだと思うよ、嬢や」とウッドハウス氏は溜息をつきながらいった。「わたしは、ときどき自分が気まぐれで厄介者だと思うことがある」
「まあ、お父さまったら！　まさか、わたしが、お父さまのことをいってるなどと、お考えにならないでしょうし、またナイトリーさまがお父さまのことをいっていらっしゃるなどとは、お思いにならないでしょうね。そんなおそろしい想像って、あるでしょうか……　そんなことありません！　わたし自分のことをいっただけよ。ご存じのように、ナイトリーさまは、わたしのあらをさがすのがお好きでしょう――冗談で――まったくの冗談で、

だけど。わたしたちはいつも、おたがいに好きなことをいいあっているのですもの」

ナイトリー氏はじっさいに、エマ・ウッドハウスの欠点をみとめることのできる少数の人の一人であり、かつ、いつでもそれを彼女に話す唯一の人だった。それはエマ自身にも、あまりありがたいことではなかったが、父にはもっとおもしろからぬことだと知っていたので、自分がだれからも完璧な人間と考えられているわけでないという事情を、父が信じて疑わないようにしておきたかった。

「エマは、ぼくがおべっかなどけっしていわないことを知っています」とナイトリー氏はいった。「だがぼくは、だれのことも非難するつもりではなかったのです。テーラーさんは、二人の人に気に入られようとする生活をつづけてきていましたが、今度はそれが一人になります。どうやらあの人は成功するでしょうね」

「ところで」とエマは、その問題はそのままにしておこうと思いながらいった――「結婚式のことをお聞きになりたいでしょうし、わたしもお話しするのはうれしいわ。わたしたちはみなじつにみごとに振舞ったのですのよ。だれも時間どおりでしたし、だれも最上の容顔のうるわしさでした。涙ひとつ見られなかったし、不景気な顔なんて世にあるものかしらというふうでしたわ。あら！そうよ、わたしたちは、離れたといっても、わずか半マイルだけのことで、きっと毎日だって会えるわ、と感じたのですもの」

「このエマは、どんなことにもよく耐えるからね」と父はいった。「でも、ナイトリーさん、この娘もほんとは、気の毒なテーラーさんを失うのは心から悲しくて、きっと、思っているよりもさびしがることになるでしょう」

エマは、涙を流していいのかにっこり笑っていいのか迷って、顔をそむけた。

「エマがあんなお友だちに別れてさびしがらないなんて、考えられません」とナイトリー氏がいった。「そんな推測ができるのであれば、われわれはこのように、エマが好きなはずはありません。だが、エマは、この結婚がどんなにテーラーさんのためになるか知っています。テーラーさんの年ごろともなれば、自分自身の家に落ちつくことが、どんなに喜ばしいか、不自由のない暮らし向きを確保することが、どんなに重要であるか、知っています。だから、喜びよりも嘆きを先立てることなどは、とうていゆるせないと思っているのです、テーラーさんの友だちはだれでも、彼女がこんな幸福な結婚をしたことを、喜びとしているはずなのです」

「それにあなたは、わたしにとってうれしいことを一つお忘れになっています」とエマはいった。「しかも、と

ても重要なこと――わたしが自分で、この縁組をまとめたっていうこと。ご存じかもしれませんが、この縁組を、わたし四年前にまとめたのよ。ウェストン氏は再婚なんか絶対にしない、という人があんなにたくさんいたのに、これを実現させて、よかったとみとめさせることになったのは、どうあっても、わたしの欣快とするところよ」

ナイトリー氏は、彼女に向かってうなずいた。父は、いとしげに答えた。「ああ！　嬢や、あなたは縁組をまとめたり、いろんなことを予言したりしないといいよ。あなたのいうことは何でも、いつもそのとおりになるんだから。もうこれ以上縁組などまとめないでください」

「自分のためにはしないって約束します、お父さま。でも他人のためにはどうしても、まとめますわ。この世で最大の楽しみよ！　それに、あんなふうにうまくいったあとですもの！――ウェストン氏は再婚なんかしないって、だれもがおっしゃっていたわ。そうですとも！　ウェストン氏は、あんなに長いことやもめを通していらっして、奥さまが亡くなっても、あんなに不自由なく見えて、ロンドンのお仕事や、ここでのお友だちづきあいで、あんなにしょっちゅうお忙しそうに見えて、どこへいらっしても、いつも歓迎され、いつも愉快そうだったのですもの――ウェストン氏は、おいやなら、一年のうち一晩だってお一人ですごす必要なんかないのですもの。そうですとも！　ウェストン氏は、たしかに絶対に再婚なんかしませんとも！　奥さまの死の床でなすったお約束のことまで話す人もあったし、令息や伯父さんが再婚させないだろうと、話す人もありました。そのことについては、あらゆる種類のもっともらしいたわごとが、話されましたけど、わたしは、そんなことはどれ一つ信じなかったわ。ことの始まりはテーラーさんとわたしとが、ブロードウェイ・レインで（四年ほど前のことだけど）あの方にお会いした日だったわけで、そのとき、小雨が降りだしたものだから、あの方はとてもご親切に、わたしたちのためにミッチェルさんの農場へ飛んで行って、傘を二本借りてきてくださったのですが、それからずっと、わたしはその問題について、心をきめたのよ。その瞬間から、縁組の計画を立てたのよ。そしてこのばあい、こんなにも成功したんだから、お父さま、わたしが縁結びをやめるなんて、お考えにはなれないでしょう」

「あなたが『成功』というのはどういうことか、ぼくにはわかりませんね」とナイトリー氏がいった。「成功とは、努力を想定しているのだ。もしあなたが、この結婚を実現させるために、この四年間努力を傾注してきたというのならば、あなたの時間は、適切巧妙に使われたことになる。若い婦人の精神には価値ある仕事だった！　だがもし、これはむしろぼくの想像だが、あなたのいわ

ゆる縁結びが、ただ計画したというだけのこと、つまり、ある手持ぶさたな日に、『ウェストン氏がテーラーさんと結婚したとすれば、とてもすてきなことと思うわ』と自分につぶやき、その後も折りにふれては、また同じことをつぶやくだけのことだったら――どうして成功などという言葉をつかうのです？　どこにあなたの功績があるのです？――あなたは何を誇りにするのです？――あなたの推測が幸運にも当たった――いえることは、ただそれだけです」

「ではあなたは、幸運にも当たった推測の、喜びと誇りとをご存じありませんの？――お気の毒ですわ――もっと賢明な方だと思っていましたわ――事実、幸運な推測というものは、ただの幸運だけじゃないんです。そこにはいつも何らかの才能がはいってるんです。『成功』という、わたしの貧弱な言葉も、あなたはそれに異議をとなえていらっしゃるけど、わたしは自分がそういうだけの権利が、全然ないとは思わないわ。あなたは二つのみごとな画面をお描きになったけど――わたしはもう一つの画面があるだろうと思いますわ――何もしないのと何でもするのとの中間のものが。わたしがもし、ウェストンさまがここへ訪ねていらっしゃるようおすすめしなかったら、またささやかながらいろいろ取り持ち役をしたり、ささやかながら何やかやの障害をのぞいたりしなかったら、けっきょく、どういうことも実現できなかったかもしれなくってよ。あなたはハートフィールドのことは十分ご存じなのだから、そのくらいのことはおわかりになるにちがいありませんわ」

「ウェストンのように率直で腹蔵のない男性と、テーラー嬢のような理性的で気取らない女性とは、放置しておいても、自分たちの問題は自分たちで始末するのです。あなたは介入することによって、あの人たちのためになったというよりは、自分に害をあたえたらしいですね」

「エマは、他人のお為になれさえすれば、自分のことなど考えないのです」とウッドハウス氏は意味がいくぶんしか理解できずに答えた。「でも、嬢や、もうこれ以上縁組をまとめないようにね。ばかげたことだし、家庭の平安というものをめちゃめちゃにしてしまうのだから」

「もう一つだけよ、お父さま。エルトン牧師のためもう一回きり。お気の毒なエルトンさん！　エルトンさんはお好きでしょう、お父さま――わたし、あの方に奥さまを探してあげなければ。ハイベリーには、あの方にふさわしい人は一人もおりません――ここへいらっして、まる一年にもなっていて、お家の設備もとても快適になすったんですから、これ以上お一人にしておくなんて、恥ずかしいことですわ――今日あの二人の手をつなぎ合わせていらっしゃるとき、まるで自分も同じようにはから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb